

池谷・関 彗星

長崎南高校 地学部

この彗星は9月19日朝方静岡県池谷薫氏と、高知県の関勉氏によってほぼ同時刻に発見された。発見位置など関氏のものを用いてみていくことにしたい。

発見位置：赤経8 h 4 5.^m4 赤緯：-8°
3 8' のうみへび座 (1950.0分点)
光度(等級)：8等級 視直径：3'

すぐに確認されて東京天文台から、アメリカのハーバード大学天文台の中央局へ連絡された。そして、次のように命名された。

Comet IKEY・SEKI 1965f

発見時刻は、両氏の平均をとり、18日19時12分(U. T)を採用された。

その後太陽に接近してゆき、光度、尾ともに増加していった。そして、全世界で注目された21日(10月)には-1.5等というすばらしさで観測された。その日近日点通過日時は、21日(21.7023 U. T)と報じられ、近日点距離は0.0079(A. U.)とのものであった。同日9時50分に倉敷天文台の本田実氏は、写真撮影に成功された。また13時37分には東京天文台乗鞍コロナ観測所のコロナグラフにより、彗星頭部が3個に分裂したのが認められた。我々地学部も、夜明け前から東天に注視していたが、尾すら見えなかった。しかし、17時30分頃もう日没頃であったが太陽前面付近にそれらしきものを観測した。しかしそれが確かだとは言えない。翌日が曇りで観測できなかったこと、詳しいデータがなかったからである。

以後しばらくは太陽光に妨害され観測でき

なかったが、再び肉眼で見得るとの報道で観測計画をたてていた。10月下旬各地で同彗星の観測、写真撮影がなされたので我々も実行することにした。

11月3日4時(J. S. T)すぎ遂に同彗星を捕えた。南東方向低いところにあったので最初は阿蘇山の噴火だろうかと驚ろいた。けれども、用意した口径5cmケプラー式屈折望遠鏡経緯台で、先端部を観測してみても彗星だとわかった。その時の喜び、感激、何とも言えないものがあった。まさかこのようにすばらしいものだとは予期してなかったので観測準備は充分ではなかった。先端部はからす座に達し、尾の長さは約30°後端部は「うみへび座」にまでおよんでいた。用意していたアサベントックスでとりあえず撮影を開始し、一方では望遠鏡でながめていた。(解説図)

これも、長くはなかった。太陽とはみかけ上赤経で1h30^m位しか離れてなく、次第に明けゆくために尾が見えなくなり、先端部も消えていった。そして青々とした空が現われてきた。すがすがしい朝であった。

〔注〕 解説図での等級は写真等級、時刻は、日本標準時(J. S. T)、分点1950.0である。

11月3日以後は曇空で月の妨害があるといったふりで観測できなかつた。11月10日頃、観測したが肉眼では見えなかつた。もちろん月明があったからであろう。17日朝方も注意したが雲が多く見えなかつた。そして

18日 ● この日はよく晴れたので望遠鏡を使用してさがしたが認めることはできなかった。

17日, 18日はすばらしい流星雨をみせた獅子座流星群の極大(最盛)日にあっていたので観測かたわら, 東天(正確にいうと南南東の空)を注意していた。その後はどのようになつたのか, 我々が捕えた慧星は3個に

分裂したものどれにあたるか詳しくデータがないのではっきりしない。

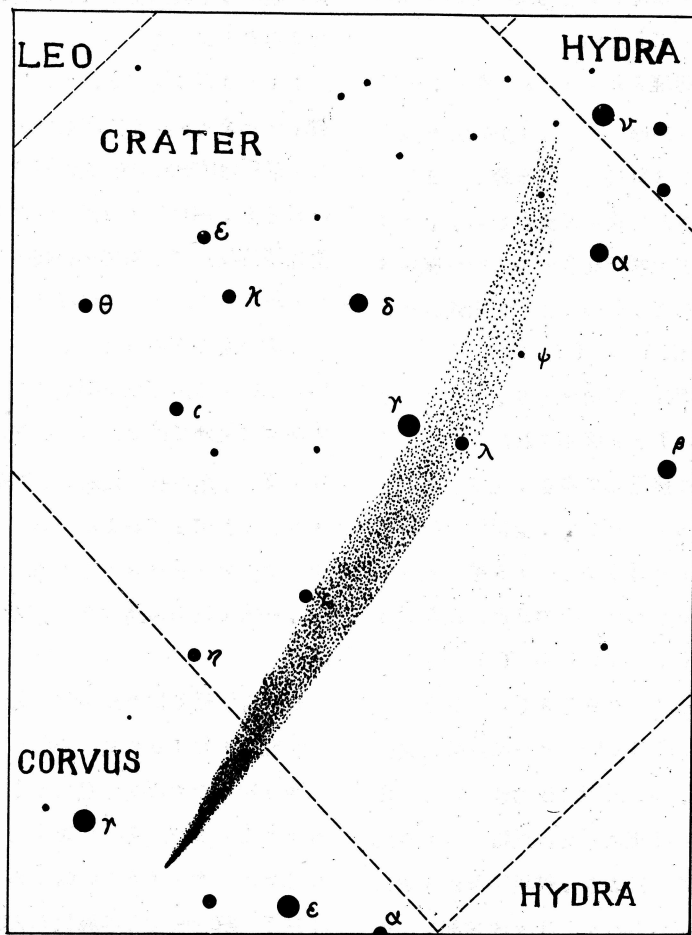
11月20日(地学部天文班)

参考文献

東亜天文学会機関(紙)誌 「天界」

第485号

日本流星委員会会誌「天文回報」第280号



● 4等星 ● 5等星 ● 6等星 ● 7等星

池谷, 関慧星 先端部: 赤経 $12^{\text{h}} 11^{\text{m}}$, 赤緯 -18.5° , 尾の長さ 約 25°

写真等級 4

1965年11月3日(4時27分より10分露光, アサヒペンタックス 55ミリ

f 1.8, 開放, SSS, 唐八景で撮影 富山栄二他10名)